

# 永 遠 の 楔

コードギアス 反逆のルルーシュ R2  
シャーリー×ルルーシュ 18禁小説本

PARALLEL ACT



# 永遠の楔

## 目次

第1章	.....	5
第2章	.....	11
第3章	.....	21
あとがき	.....	28

Hの最中にギアスキャンセラーが発動してしまった二人は……

## あらすじ

注意!! これは頒布促進用のあらすじです。当然ネタバレですので、本編をじっくりと読みたい方は、このページを読まないでください。

なお、微妙に本編と違う所がありますが、ご了承ください。

### 1

ルルーシュとシャーリーは初デート。失敗もあるけど、どうにかデイナーまで無事に終る。

### 2

初H♡ シャーリー結構絶倫。

## 第1章

### 1

「おめでとう」

「おめでとう、シャーリー」

「やっぱりこの二人よね」

図書館から出てきたシャーリーとルル・シュを皆が祝福する。恋人同士という本来私事の関係が、学園中に、それもいきなり知られることとなった訳で、とても恥ずかしい。

「おめでとう、幸せになってね」

「会長……」

恋人になったと言うよりも、まるで夫婦になった時のような祝辞だ。

「はい、それじゃ解散、後は二人だけの時間ね」

ミレイ会長が観衆を追い立てる。会場にはシャーリーとルルだけが残された。ルルの顔を見ると、厳しい顔をして一点を見つめている。

何か気に触ったんだろうか？ やっぱり大勢へのお披露目は嫌だった？ 私も好きな訳じゃないけど。

「なあ、シャーリー」

「何？ ルル」

「恋人というのは、その、何をすればいいんだ？」

「へ？」

シャーリーは思わず目が点になる。ルルって、こんな事で悩んでたんだ。

「えっと、例えばデートとか」

「デート…… そうか、デートか！ シャーリー、今度の日曜日空いていますか？」

「え？ うん、空いてるけど」

「よし、では今度の日曜日デートをしよう！」

「ええっ!？」

「なんだ、デートをするって言ったのは君じゃないか」

「その、いきなりでビックリしたから。うん、日曜日ね。どこに行く？」

「任せてくれ。最高のデートコースをセッティングするか」

「ルルがセッティング？」

シャーリーは一抹の不安を覚える。この手の事に疎（と）そうなるルルがデートコースをセッティング…… 何か嫌な予感

がする。でもそんなルルが一所懸命考えたデートコースも見てみたい。

「うん、分かった。ルルに任せるよ」

## 2

「えつとお、どれ着てこっかなあ?」

土曜日の夜、シャーリーは明日のデートに向けて服を選ぶ。

「この服も良いし、こっちもすてがたい」

シャーリーは姿見の前で、何着も服を当てては取り替える。

「でも、ルルどこに連れて行ってくれるんだろう? 遊園地かな? それとも映画とか? 最後にレストラン? ルルの事だからべたな所選びそう。あ、服どうしよう? 遊園地だと動きやすい服が良いし、ドレスコードがあるよ。うなレストランだとそのまま入れないし…… あゝ 悩んじゃうー!」

「よし、これにしよう」

何時間も悩んでようやく服を決める。そして、明日のた

めに買っておいた新品の下着を忘れないように横に置く。最初のデートだし、ルルだし、特に期待してるわけじゃないけど、やっぱりね。

## 3

「寝坊したあ!!」

シャーリーはベッドから跳ね起きる。昨晚遅くまで服を選んでいた上に、全然寝付けなかった。

急いでシャワーを浴びて、髪を梳かす。こんな時に限って纏まらない。

「あゝもゝ 時間無いのにい!」

どうにか髪を梳かし終えて、昨晚選んだ服を着ようと椅子から立つ。そしたらするりとバスタオルが解け、さらに解けたバスタオルを踏んで転んでしまった。

情けなくて、どうにもならなくて、じわりと涙が出てくる。でもここで泣いたらルルの前に出られなくなる。シャーリーは必死に堪えて服着る。

「行ってきます!」

そしてハンドバッグを掴むと、急いで待ち合わせの場所に向かった。

「遅い！」

待ち合わせの場所で、ルルーシュは何度も時計を見る。約束の時間から二十分経過している。予定通り事が進まないと気が済まない性格のルルーシュは苛々を募らせる。

「いきなり遅刻とは……」

（いかにいかん。こう言う時は笑って『ごめん、待った？』  
『いや、今来た所』と答えると、マニュアルに在ったではないか）

ルルーシュは、デートを決めてから何度も読み返したデートマニュアルを思い出す。

（平常心、平常心。女の子は時間が掛かるものだ）

さらに十分が経過した。

「ルル〜！ ごめ〜ん！ 待ったあ!? はあはあ……」

シャーリーがようやく現れる。全力で走って来たのだから、肩で息をしている。ルルーシュは、先程シミュレーションした通りの言葉を発する。

「いや、俺も今来たところ……」

そこまで言った頃で、ルルーシュは息を詰まらせる。シャーリーが必死に息を整えながら、上目遣いでルルーシュに顔を上げてている。汗が頬と首を伝い、湿気で潤った髪が艶め

かしい。

「どうしたの？」

「い、いや、何でもない」

シャーリーに見とれていると、不思議に思った彼女が声を掛ける。しかし「見とれていた」等と言えるわけがない。

「それじゃあ、行こうか」

「うん♡」

ルルーシュはまずデートの定番、映画館に案内した。

「どの映画観るの？」

「これだよ。『大女優が自分の人生を語る』と言う内容で、評判良いみたいなんだ」

「でも、これもう始まつてるよ」

「う……」

よく見ると開館時から十分が経過している。CMも終り、映画の本編が始まる時間だ。

「ごめんなさい…… 私が待ち合わせの時間に遅れたから……」

「そんな事はないよ。こういう事態を想定していなかった俺の責任だ」

「でも……」

「ほら、ここち。ここちの映画なら今から始まるところだ」  
 そう言って、ルルーシュは特に内容を確認せずにチケットカウンターに向かう。

二人が観た映画は三本立ての映画だった。一本目はファンタージーアクション映画。二本目は、喋るバイクに乗って少女が旅をするというものだった。

ふとシャーリーが横を見ると、ルルーシュが寝息を立てている。余程つまらないらしい。シャーリーがルルーシュの鼻を摘むと、驚いて起きた。その様子をクスクスと笑う。  
 三本目の最中に、今度はシャーリーが眠ってしまった。デートに悩んで寝られなかったつけが来たようだ。今度はルルーシュが起こす。

『しゅくちっ!!』

起きたシャーリーの前に、スクリーンいっぱいの象さんが映し出された。その余りにもピッタリなタイミングに二人は固まる。

「全く、なんて映画だ!」

ルルーシュが文句を言いながら劇場を出る。シャーリー

は少し顔を赤らめて俯うつむいている。

「えっと、結構面白かったね」

シャーリーがルルーシュに笑いかけますが、作り笑いにしか見えない。

（いかん! これではシャーリーを楽しませるところか微妙な雰囲気なってしまう。なんとか次で挽回しなくては）  
 「シャーリー、次は楽しいから!」

「ここ?」

「ああ、このデパートでオリエントの美術展をやっているんだ」

二人はエレベーターで目的の階に着くと息を呑んだ。撤収作業をしている。

「あの、ここではオリエント美術展をやっている筈では?」

「申し訳ございません。昨日トラブルが起こりまして、終了が一日早まってしまったんです。前売り券をお持ちの方は払い戻しを……」

「うぐっ!?!」

（昨日まで!? なんて事だ! 駄目だ! 挽回どころか、呆れた目で俺を見るに違いない!）



「ねえ、ルルーシユ」

頭を抱えているルルーシユにシャーリーが優しく声を掛ける。

「どうせだから、このデパート見て回りましょ」

シャーリーの気遣いにルルーシユはホッとすする。

「ありがとつ。お詫びに、服を買ってあげるよ」

「えっ!? 本当? んゝ でも今日はいいわ。荷物になるもの」

「はは、そうか、そうだよな」

「あ、でも覚えておいてね。次ショッピングに来た時に買ってもらおうから」

「ああ、素敵な服をプレゼントするよ」

「この後は?」

「次は水族館に行つて…」

「その次は?」

「公園かな。夕日が綺麗な場所があるんだ」

「ちよつと忙しいけど、ルルにしては及第点かな」

「厳しいな」

「あちこち遠い場所を移動すると、移動するだけで疲れちゃうでしょ」

「なるほど、そうか」

「ねえ、水族館止めにして、その公園で歩かない?」

「別にいいけど、それで満足なのか?」

「ルル、デートはね、どこに行つたじゃなくて、誰と行つたかが重要なのよ」

5

「綺麗……」

公園を散歩して、売っていた食べて、ベンチで語らう。何気ないのに楽しい。そして、海に向かって開けた展望台が夕日で茜色に染まる。

「ああ、こんな美しい夕日を見たのは何年ぶりだろう」

「何年ぶりだなんて大げさな」

「最近心休まる日が無かったから」

「何? そんなに忙しかった?」

「ちよつとな。でも、今日は君のおかげでとても楽しかったよ……」

そういつて、ルルーシユはじつとシャーリーの瞳を見つめる。シャーリーも見つめ返し、そつと目を閉じる。そのまま二人の距離は縮まり、唇が重なる。  
「キス、二回目だね」

「ああ……」

「ファーストキス、本当にビックリしちゃった」

「それは言わないでくれよ」

（本当のファーストキスはシャーリーからだっただな）

そう、本当のファーストキスはシャーリーの父親がゼロの作戦に巻き込まれて死亡した時だ。ルルーシュに変装した咲世子がしたキスは二度目だ。

「でも、やっぱりファーストキスはこんなムードのある所でしたかったな」

「ごめん。でも、これはからムードのあるキスを幾らでもできるさ」

「……やっぱりルルね」

「え？」

「そんな『幾らでもする』もんじゃないでしょう。それにファーストキスは一回しか出来ないんだし」

「そうか、ごめん」

「ルルはもう少し女心を勉強した方が良いよ」

「ああ、努力する」

「でも女心が分かり過ぎるルルはルルじゃないけどね」

「……」

（どっちなんだ？）

分からない。女心というのは分からない。

夕日が完全に沈み、少しずつ辺りが暗くなってくる。

「暗くなってきたね。これからどうしようか？」

「それなら、近くのホテルに予約を取ってある」

「ホテル…… ルルって、最初のデートでホテルに誘うんだ」

シャーリーが少し顔を赤らめて、ルルーシュを軽く睨む。この手の事には疎いルルーシュだが、流石にシャーリーが言いたい事は分かった。

「ち、違う！ 誤解だ!! 最上階にレストランがあるんだ！ とっても眺めが良くて、美味しいと評判で……！」

くすつ。

「やだあ、分かってるわよ」

シャーリーがくすくすと悪戯っぽく笑う。

「ルルがいきなりベッドに誘うなんて思っていないから」

「それは、俺を信用しているのか、甲斐性が無いと思っっているのか、どっちなんだ？」

「んふふ。ひ・み・つ♡」

## 第2章

### 1

階下に広がる海、月明かりが反射し、キラキラと光っている。ホテル最上階、窓際の席のロケーションは最高だった。二人はディナーを堪能した後、学園の寄宿舎への帰途につく。

ホテルの玄関から出た瞬間、もの凄い豪雨が二人を襲う。バケツをひっくり返すとはこの事。あっという間に全身びしょ濡れになってしまう。

「きゃああっ！ 何これえっ!?!」

「ホテルの中に戻るっ」

ホテルのロビーに引き返す。全身ずぶ濡れ、下着までぐっしょりだ。周りには同様に引き返してきた客が何名もいる。

「くしゅん!」

シャリーが可愛くくしゃみをする。

「不味いな。部屋を取って、服を乾かしてもらおう」

「うん……」

「何だっつて！ 部屋が一つしか取れない!?!」

「はい。なにせ突然の大雨でして、同様のお客様が他にも。その代わり、料金はその分サービスさせて頂きます」

ルルシユはシャリーの方を見る。

「私なら良いよ。他にもびしょ濡れの人達がいっぱいいるんだもん。譲り合わなきゃ」

「そうだな。すまない、こんな事になって」

「謝らなくて良いよ。ルルが悪いんじゃないし」

（それに、相部屋って、私達が親密なカップルに見られてるって事だよな）

### 2

ボーイが部屋まで案内する。服を入れるための籠かごを受け取ると、ドアを閉める。

「じゃあ、シャリーが先にシャワーを使ってください」

「良いの?」

「さっきくしゃみしてたじゃないか。風邪引いたら大変だ」

「うん。ありがとう」

「じゃあ、服を脱いだら籠に入れてください。ボーイに渡すから」

「うん、分かった」

シャリーはシャワールームに入ると服を脱ぎ、籠に入る。流石に下着を出すのは憚られる。かといって室内に干すとルルーシユに見られてしまう。そこで、バスタオルに挟んでおいて、後でドライヤーを使って乾かすことにした。

「ルル」

籠の上に一枚タオルを載せて脱いだ服を隠すと、シャワールームから首だけ顔を出し、ルルーシユを呼んだ。

「もう脱ぎ終わったの？」

ルルーシユも服を脱ぎ終り、バスタオルを腰に巻いていた。その姿にシャリーはドキツとする。男子の上半身なんて水泳の授業や部活で見慣れている筈なのに、ホテルの一室でのバスタオル姿は違う。

ルルーシユはシャリーから籠を受け取ると、自分の服を入れ、ボーイを呼んで渡す。

「じゃあ、俺のことは気にしなくて良いから、ゆっくりシャワーを浴びてて……へくしゅー！」

「……なるべく早く浴びるね」

シャリーはドアを閉めると、シャワーの蛇口を捻る。バスルームは湯気に包まれる。温かいお湯を浴びると、冷

え切った身体が生き返る。

(なんだか、変なことになっちゃった)

ひよんな事でルルと、ホテルの部屋に居る事になった。そしてシャワーを浴びている。ルルは奥手だし、変な事はないだろうと思っただが、ファーストキスをいきなり奪われた事を思い出すと、安心する訳にもいかないだろう。でも、ルルだったら嫌じゃない。むしろ……

(駄目駄目。だってまだデート一回目だし)

では、何回目のデートだと良いんだろう？ 一回目？ 二回目？ 彼氏とHしたと話す友達は結構いる。でも、何回目のデートかはあまり訊かなかった。少し鼓動が速くなる。嫌われてはいけないと思って、ちょっとだけ念入りに身体を洗う。

「ルル、終わったよ」

「そうか、じゃあ、俺の番だな」

「!? ルル、どうしたの？ 真っ青！」

バスタオルを巻いて外に出ると、「ルルも期待して赤くなってるんじゃないか」とか、「自分のバスタオル姿を見てドキドキするんじゃないか」とか思っていた考えは即座に打ち消された。雨に濡れた後、バスタオルだけのルルは

身体が冷えて青ざめている。

「ルル、早く入って」

「ああ……」

シャーリーは震えるルルをバスルームに入れた。触れた肌がとても冷たい。

「ごめんない、ルル。早く浴びるって言ったのに！」

「気にすること無いよ。それよりも湯冷めしないようにね」  
そう言っただけでドアを閉める。

「はあ、駄目だな。私って……」

自分が妄想に浸っている間、ルルは凍えて待っていた。そんな自分を恥ずかしく思う。これ以上心配掛けさせてはいけないので、湯冷めしないように、念入りに髪をドライヤーで乾かす。そして、下着を乾かしている所でルルがバスルームから出てきた。シャーリーは慌てて下着を隠す。「ルル、終わった？ 私モドライヤー使い終わった所だから、次ね」

「俺はドライヤーは良いよ」

「駄目だよ、ルル。ちゃんと使わないと。座って、私が掛けてあげる」

「なっ!? いい、自分でやる」

シャーリーにドライヤーを掛けてもらうくらいなら、まだ自分でやった方が恥ずかしくないのだから。ルルはドラ

イヤーを受け取ると、自分で髪を乾かす。

その間、シャーリーはベッドに腰掛けてルルを眺める。ひ弱なルルらしく、とても細い。じつと見ていて、鼓動が早まる。ホテルの一室で二人きり、身に付いているのはバスタオル一枚だけ。こんな状況で落ち着けと言う方が無理だ。

もし、ルルが襲ってきたらどうしよう？ ルルは細いから、もしかするとシャーリーの方が力が強いかもしれない。でも、襲って来なかったら来なかったで、自分に魅力が無いと思われているようだ。こんな状況で何も無い、それこそあり得ない気がする。幾ら他に部屋が無かったとは言え、男女同室になったのなら、そういう事態になる事は十分覚悟しておかなければならない。

ルルはどうしてくるだろう？ 優しく愛を語ってくるだろうか？ いやいや、ルルはそんな事しそうにない。じゃあ、やっぱり乱暴に襲ってくる？ それもあり得ない。でもワイルドなルルはちょっと見てみたいかも。

そして、ルルのドライヤーが終わった。ルルがこっちに来る。シャーリーはドキドキしながらルルの次の行動を待った。

「じゃあ、俺はソファの方にいるから」  
がくっ……

脱力すると本当に身体が崩れる、と言っことをシャーリー

は初めて知った。

「ちよっ！ 何よそれえ！」

シャーリーは思わず立ち上がったて叫ぶ。

「だって、ベッドに居られる訳ないじゃないか。こんな格好で。その、男女が……」

「んもおう！ 私達、恋人同士なのよ！」

ルルの元へ歩いて行き、手を掴む。

「ルルは、私と…… したくないの？」

そう言っつて、ルルの手を自分の胸に当て、じっと瞳を見つめる。

「ふうっ!!」

ルルが焦って息を詰まらせる。顔が引き攣り、手がピクピクと動く。動かしたい、でも動かせないと葛藤しているようだ。でも逆にこそばゆい。

シャーリーは踵を上げ、目を閉じる。ルルはどう出るだろうか？ とても長い時間が経過したかに思えた。

ルルは左腕をシャーリーの腰に回すと、ぐっと引き寄せた。そのまま力強くシャーリーの唇が塞がれる。とても強いキス。身体に電流が走る。少し意識が飛び気味になる。わずかに開いた唇の隙間から、ルルの唾液が流れてくる。シャーリーは少し舌を出し、ルルの唇に触れる。すると、今度は逆にルルの舌が口腔の深くまで侵入してくる。ルルの

舌がシャーリーの舌を嘗め回す。それと同時に右手ががっしりと胸を掴んで揉み上げる。

ふつと身体から力が抜ける。次の瞬間シャーリーがへたり込む事で唇と胸が離れる。

「大丈夫か？ シャーリー」

「う、うん。平気……」

まさかキスだけで立てなくなるとは思わなかった。ルルが腕を引いて、シャーリーを立たせる。余り足腰に力が入らないシャーリーは、ルルにしがみつく。そのままベッドまで歩いて行き、二人は腰掛ける。

「ルル、キス上手いのね」

「そんな事は……」

「ううん。立てなくなるなんて思わなかったもん」

そう言っつて、シャーリーはルルに身体を寄せる。ルルも肩に手を回し、引き寄せる。

「本当に良いんだね？」

「うん。ルルの事、好きだから」

シャーリーはバスタオルを解く。大きくて形の良い胸が露になる。二人は再び唇を重ね、お互いに舌を入れ合う。

そしてゆっくりと、ルルが覆い被さるよ様にベッドに横になる。ルルの重さを感じる。華奢に見えてもやっぱり男の子、結構体重はあるみたい。ルルを少し見直す。重さと

圧迫感が遅しさを感じさせ、安心感をもたらす。

それと同時に、お互いの胸と胸が、服越しではなく直接触れ合う。布という二人を間を分かつ障害物が無く、直接肌と肌が触れ合うとは何と素晴らしいことだろう。もっとルルを感じたい。シャーリーはルルの腰に手を伸ばすと、巻いてあるバスタオルを解いた。ルルもその行動を理解して、バスタオルを引き抜くと床に棄てた。これで二人を分かつ物は何も無い。

コツコツと何か硬い物が股間に当たる。シャーリーはそれがルルの物だと気づいた。ルルのペニスがシャーリーの秘部を突く。その度にはゆるりにゆるりと滑って、逃げる。逃げる時の刺激や、ペニスの裏がクリトリスと擦れる刺激で背中に電流が走り、堪らず声を上げる。

「シャーリー」

「何？ ルル？」

「これ、入ってるのかな？ もう入ってるのかな？」

今まで指も入れたこと無いので、中に入っている感覚というは分からない。でもこの痺れは、身体の中からと言うよりも、表面から来ている様な感じがする。シャーリーは自分の股間に手を伸ばす。ルルの硬いペニスがそこに在った。「やっぱり、入ってないみたい」

シャーリーは、そのペニスがとてもぬるぬるしているのに驚く。男の人のペニスってこんなだろうか？ しかし、それは直ぐに間違いだと分かる。ルルを自分に導こうとする時、自分の方が濡れている事に気づいた。話には聞いていたが、自分の股間がこんな風になるなんて、自分でも信じられない。ずっと誇張だと思っていた。

「多分、ここよ」

自分の膣穴の位置を触って確かめた事は無かったが、生理の時に濃くなる場所に導き、当てる。抱き合っているので見えないが、指の感覚だけで分かる。

（大きい）

親指と人指し指で摘むのがやつとだ。こんな太い物が自分の身体の中に入るなんて信じられない。でも、赤ちゃんはここから出てくるし……

「じゃあ、行くよ」

「うん」

ルルーシュがシャーリーの肩を掴み、ゆっくりと身体を前進させる。今度はシャーリーが支えているので、ずれることはない。じわじわと自分の股間が押し広げられているのが分かる。

パリッ！

「!？」

股間に痛みが走る。何か引き裂かれたと言っか、割けた様な痛みが一瞬走った後、今度は傷口を引き摺ずられる痛みに変わる。これが処女膜が裂けた痛み？

「シャーリー、今度は入ったる？」

「うん、入った……」

「どうした、シャーリー？ 苦しそうだけど」

「そんな事ない。少し痛かっただけ」

「痛かった？ ごめん、直ぐ抜くから」

「ううん。いいの。これもルルと一緒にあかしなれた証だもん。

それより、ルルはどう？」

「ああ、何だか、今まで味わったことの無い感覚だよ。暖かくて、包み込まれているような…… ああ、なんかぞくぞくする」

「良かった、ルルが気持ち良くて」

二人はそのまま繋がっている実感を味わう。時折ルルのペニスがピクピクと動くのが分かる。そして、段々と痛みが和らいで来る。

「ねえ、ルル。動いていいよ」

「動いて良いのか？ 痛いんじゃない？」

「もう痛くなくなっだし、動かないと気持ち良くならないんでしょ」

（今のままでも結構気持ち良いけどな）

「分かった。ゆっくり動くよ」

ルルの身体が一旦下がる。膣壁がペニスに引き摺られる。また痛みが来る。シャーリーは思わず顔を歪めるが、なるべくルルに悟られない様にする。

ルルが何度か動いていると、潤滑液が馴染んできたのか、動きがスムーズになる。膣壁が引き摺られる感触も無くなり、痛まなくなってきた。

「ああ、はあ……」

ルルの顔が弛ゆるんで、気の抜けた声を出している。ルルが私で気持ち良くなっていると思うと嬉しくなる。ルルが動く度に、自分の身体が押し広げられたり、擦こすれたり、何だか分からない感覚が湧き上がってくる。

「ああっ……」

（え？ 何？）

ルルがシャーリーに覆い被さり、股間を思いつ切り押し付け、腕はシャーリーの身体をしっかりと抱きしめる。シャーリーがルルの突然の行動に驚いていると、身体の中でペニスがピクピクと動いているのが分かる。それから、ルルは動かずじっとしていて、息を荒げているだけだ。

「ルル、どうしたの？ 動かないの？」

「イった……」

「何？」



「いった…… 気持ち良かった…… オナニーとは全然違う……」

ルルが独り言のように呟く。シャーリーはルルもオナニーするんだと感心する。男の子だから当然だけど。でもルルが自分でペニスを握っている姿を想像するとおかしい。それと同時に、ルルが自分で気持ち良くなってくれた事が嬉しい。

「シャーリー、君は？」

「私は、まだ」

「ごめん、俺だけ気持ち良くなって」

「うっん、ルルと一緒になれて嬉しい。それだけで良いの」

「そうか、ごめんな……」

そう言っ、身体を起こすルルを抱きしめて、離れないようにする。

「暫く、このままでいて。ルルを感じたいの」

「分かったよ」

それから暫く二人は繋がったままだった。時々ルルがピクピクと動く。その刺激でシャーリーのもギュツと絞まる。それらが繰り返されると、ルルが再び硬く大きくなってきた。

「シャーリー、また動いていいかい？」

「うん」

ルルは再び動き出した。さっきよりも動きが激しい。じ

わじわとよく分からない感覚が再び起こる。

「はあ、あ……」

今度はシャーリーからも声が漏れる。潤滑液もさらに増えたのか、ぐちゅぐちゅといやらしい音が響く。

「凄い、シャーリーの中、ぬるぬるして…… 融けそうだ……」

「あ、ふうっ」

ルルが突いていると、段々と身体の奥から押されて、お腹の中が動かされる感覚が出てきた。

「何だ、これ？ 何かコリコリと…… 当たる……」

「ひあっ！」

膣の入り口だけでなく、その奥からも快感が湧き上がってくる。段々ルルの声が聞こえなくなってくる。目を瞑っている筈なのに、視界が白くなっていく。

「……」

（何？）

ルルが耳元で囁いている上手く聞き取れない。

「また、イクよ」

辛うじてそれだけ聞こえて、シャーリーは気を失ってしまった。

気が付くと、ルルが隣にいて、じっとこちらを見ている。

「私？ どうしちゃったの？」

「気を失ってたんだ。少しだけ」

「どうやら、イってしまっただけだ。友達は「初めては痛いだけだった」と言っていたけど、私はイく事ができたらしい。」

「凄い気持ち良かった。それに幸せ」

「それは良かった。俺だけだったら悪いから」

「ねえ、またして」

「ええっ!? 三度目!？」

シャーリーはルルの胸を指でツーツとなぞって、甘えた声を出す。こんな気持ちの良い事、これだけで終らせたくない。

「もう無理だ！ 疲れて動けない」

「もう、だらしのないのね。いいわ、じゃあ、私がやる」

そう言っつて、シャーリーは掛けられていたシーツを剥くと、ルルの股間に向かう。初めて見る男性器。さっきまでこれが自分の中に入っていたと思うと不思議な感じになる。二つの袋と萎れた棒、昼に見た映画で象さんに例えられていた理由が分かった。シャーリーはその鼻を口を含む。

「うっつ！ 止めてくれ、シャーリー」

いった直後で敏感になった場所への刺激は強過ぎるらしい。ルルは思わず悲鳴を上げた。でもシャーリーは止めない。執拗にルルを攻め続ける。再びルルが大きくなってき、口の中いっぱいになる。萎んでいる時でもびっくりなのに、こんなに大きくなった物が自分の中に入ったなんて信じられない。

シャーリーは大きくなったルルを掴みながら、ルルの腰に跨る。

じわっ……

(あれっ!? 始まつちゃった?)

生理の時の様に何かが垂れてくる感覚があり、股間を覗き込む。そこから、普段の赤黒くベッタリした血液でなく、白い、でも少しだけ赤が混じっている液体が流れ出した。(良かった。ルルの精子だったんだ)

生理が始まったなら、ここで止めなければならない。安心すると、ゆっくりと腰を下ろす。

「うん、は……」

すーっと、ルルがシャーリーの中に吸い込まれて行った。

(私、緩くないよね?)

と、心配するくらいスムーズに。奥まで吸い込むと、シャーリーは腰を前後に揺らし始める。

「凄い、ルル、気持ちいいよ」

ルルの上に跨っていると、体重の為により深く奥まで入り、身体が満たされる。

「はあっ！」

シャーリーの身体が痙攣する。再びいったようだ。でも今度は気を失わなかった。暫く放心した後、また動き始める。

「シャーリーは元気だな」

「だって、水泳部だもん。持久力はあるんだ。ルルもスポーツ始めたなら？ でないと持たないよ」

セックスを長くし続けるためにスポーツを始めるなんて、どんな動機だとルルーシュは苦笑する。

同じホテルの一室。窓から階下の夜景を眺めるジェレミア・ゴッドバルト、通称オレンジがいる。

「美しい。この夜景は本国にも劣らない」

《見とれている暇はないよ。この後は、また別の地点に行かなければいけないんだからね》

ジェレミアは、端末に表示されている少年の指令を受ける。

「了解した。ギアスキャンセラーを発動する」

「ルル、私、またいきそう……」

「ああ、イって良いよ」

ルルーシュの上で、シャーリーが身体を動かす。つんと上を向いた、形の良い胸が上下に揺れる。

「ルル……」

そう言った所で、シャーリーが突然動きを止めた。いったから止めたと言う訳ではなさそうだ。その証拠に今度は痙攣していない。目を見開いたまま、視線が定まっていない様子だ。

「シャーリー？」

ルルーシュの声にも答えない。何が起こったのだろうか？

「思い出した……」

「？」

「私のお父さんを殺したゼロは…… ルルーシュ……」

「なっ!？」

シャーリーがゆっくりと下を向く。

「ルル……」

そう呟くと、自分の身体や周りを見渡す。顔が蒼白になる。

「やああっ!!」

シャーリーは悲鳴をあげて飛び起き、バランスを崩してベッドから転がり落ちる。

「大丈夫か!? シャーリー!」

「いや! 来ないで!!」

シャーリーは腕で胸を隠し、座ったまま後ずさる。

「お父さんの仇かたき」

### 第3章

#### 1

「シャーリー!!」  
「嫌っ!」

ルルーシュはシャーリーが嫌がっているのに構わず、近づく。こんな状況で怯んではいられない。

（何故だ!? 何故記憶が戻った!? ギアスの効力が消えたのか? いや、今までの実験でそんな事はなかった。何が今までと違う? 外部からの力か? よし、試しに……）  
ルルーシュは左目のコンタクトを外し、シャーリーの目を覗く。

「忘れる!」

前回シャーリーにギアスを掛けた時は、ルルーシュに関する全ての事象と、父親の死についての記憶を全て消した。しかし、今度は辛い思い出だけを慎重に消そうとする。

「何? ……そうやって、私の記憶を消したの? そう

やってお父さんを殺したの?」

ギアスが再び掛った様子はない。やはりシャーリーへは二度目となるので掛らないのか?

本当はオレンジのギアスキャンセラーがまだ発動し続けているので掛らないのだが、ルルーシュにはその考えは浮かばなかった。

「出てって! この部屋から出って!」

シャーリーは頑なにルルーシュを拒絶する。ルルーシュは仕方なくその場から離れる。まずはシャーリーが冷静に落ち着くことが必要だ。自分がいてはその邪魔になる。部屋から出て行ければ良いんだろうが、裸で外に出るわけにはいかない。ルルーシュはバスルームに入って、シャーリーの視界から消えた。

思い出した。お父さんを殺したゼロの正体はルル。そしてルルを守るためにヴィレッタ先生を撃った。ルルを撃つて、自分も死のうとした。そしてルルは私の記憶を消した。

ヴィレッタ先生が生きてると言うことは、ヴィレッタ先生死んでなかったんだ。良かった。でもどうして先生なの? ブリタニアの軍人じゃなかったの? どうして学園で先生をやっているの? そう言う作戦? 先生は私が撃ったこ

と覚えているのかな？ 覚えてるよね。それでずっと水泳部の顧問やってたんだ。自分を撃った相手を生徒に持つってどんな気持ちだったんだろう？ やっぱり嫌だったよね。殺してやりたいって思うよね。なのにずっと学園で私と一緒にいたんだ。

学園で一緒と言えば、ナナちゃん居なくなつたよね？ いつから居なかつたわけ？ でもどうして今総督やってるの？ 総督って皇族しか成れないんじゃないの？ じゃあ、ナナちゃんは皇族？ だとしたら、お兄さんのルルも皇族？ そんな訳ないよね。だって皇族が学園なんかに来る筈ないし。まさかルルとナナちゃんって兄妹じゃないの？ うづん、ルルのナナちゃんの溺愛っぷりは凄かったもん。本当の兄妹じゃないと……でも義理の妹だから溺愛してたとか。だからナナちゃんが大きくなつたら結婚するつもりだったとか。義理の妹って結婚できるの？ ナナちゃんと結婚するつもりで私と付き合つたの？ 私の事は遊びだったの？ うづん、でもルルなら……こないだみたいなのルルならあり得るかも……

ないよね。それはないよね。だってルル、真剣だったもん。真剣にデートコース考えて、真剣に私と向き合つて、真剣に私を抱いて……

シャーリーの頭の中で、先程のルルとの行為がフラッシュ

バックする。

嫌っ！ 恥ずかしい。でも、あの時のルル、真剣で、必死で、可愛かった。あのルルなら信じられる。ルルって不器用だもん。本気でないとあんな事出来ないよ。

うん。何か理由があるのよ。ルルに訊こう。どうしてゼ口をやっているのか？ どうしてお父さんを殺したか？

ルルーシユはバスタブに腰掛け、様々な可能性を模索する。

何故だ!? 何故シャーリーの記憶が戻つた？ ギアスが消えたのか？ 何故再びギアスを掛けようとして掛からなかったのか？ いや、掛からなかったは「一度目だから掛からない」と言う説明が付く。

何故戻つた？ 何か条件が変わつたか？ セックスしたから？ いや、それなら最初に戻つた筈だ。ならオーガズムを迎えたから？ いや、これも戻つたのは二度目の後だ。ならオーガズムを二度迎えたなら？ いや、セックスやオーガズムが条件なら、既婚男女やカップルに対するギアスが簡単に消えている筈だ。今までその様な現象は確認されていない。

いや、それよりも今後シャーリーはどうする？ 殺す？

そんな事は駄目だ。ならどうする？ 黒の騎士団に入れるか？ いや、黒の騎士団はシャーリーの仇だ。入ると思えない。どうすれば秘密にしてくれる？

それにシャーリーは俺のことを訊いてくるだろう。何故ゼロをやっているのかと？ 何故黒の騎士団を組織しているかと。どこまで話すべきだ？ ナナリーのためだというか？ 自分が皇族だと話すべきか？ 皇帝は母の仇だ。しかし、そうすると俺はシャーリーの父の仇、立場は同じだ。

「ルル……」

シャーリーの呼びかけで、ルルーシユはバスルームから出る。シャーリーは大分落ち着いたようだ。二人はベッドに腰掛ける。

「ルル、私色々思い出したの」

「ああ、そうみたいだな」

「その目で、私の記憶を消してたんでしょ」

ルルーシユはコンタクトを外したままにしている。ギアスが掛らないのならば、コンタクトを再び付ける必要もない。

「どうして？ 私がゼロの正体を知ったから？」

「違う。それは、君が辛そうだったから。何も知らないまま、平和に生きていて欲しかった」

「ルルのことを忘れる方が辛いよ」

シャーリーの目が潤む。

「それで、どうして突然記憶を戻したの？」

「戻したんじゃない。戻ったんだ。原因は分からない。色々な可能性はあるが……」

「ふうん。ルルにも分からないことはあるんだ。でも、これは答えて。どうしてゼロなんてやっているの？」

答えにくい。しかし、答えなければならぬ。

「それは、全ての弱者を守るためだよ」

「嘘。ルルはそんな事本気で考える様な人じゃないよ。本当の事を教えて！ どうしてお父さんは死ななければならなかったの？」

シャーリーが真っ直ぐにルルーシユの瞳を見つめる。ルルーシユは言葉に詰まる。ずっとルルーシユの事を見ていただけあって、シャーリーはルルーシユを鋭く見抜いている。とても嘘を突き通せはしない。

「ナナリーのためだ」

「ナナちゃんのこと？」

「ナナリーが幸せに暮らせる世界を作る。これが本当の目的だ」

シャーリーは少し黙る。この言葉が嘘でないことを確信したのである。

「それで、ナナちゃんが喜ぶと思ってるの？ 大勢の人を巻き込んで、それでナナちゃんが喜ぶと思ってるの？」

「う、それは……」

「ナナちゃんは人が争うことや、殺し合うことなんて、それで自分だけが平和に生きることなんて望まないよ。だから総督になって行政特区日本って……」

ここでシャーリーは考え込んだ。

「どうしてナナちゃんが総督なの？ それに『ナナリー・ヴィ・ブリタニア』って名乗ってたよね？」

「それは……俺達が本当はブリタニア皇帝の子供だからだ」

「嘘……」

「嘘じゃない。俺の本当の名前は『ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア』第十一皇子だ」

「そんな、ルルが皇子様……」

シャーリーは驚きの余り思考が停止したようだった。

「ルルが皇子様…… ルルが皇子様…… じゃあ、私はお姫様？」

「は？」

「皇子様が密かにお城を抜け出して、庶民の娘を見初めて恋に落ちて、それから……」

「……シャーリー、落ち着け！」

この状況が本当は耐えられないのだろう。ルルーシュは、妄想に逃げるシャーリーの腕をがっしりと掴んで、正気に戻そうとする。

「う、うん、分かった。じゃあ、ルルが皇子様で、ブリタニア皇帝陛下を倒そうって事は、ルルーシュはお父さんを倒そうって事？」

「ああ」

「ルルーシュにとって『お父さん』ってどうでも良い存在なの？ だから私のお父さんが死んでも……」

「違う！ 父は、皇帝は母を殺したんだ！ 母は暗殺され、ナナリーは目と足を失った！ 皇帝なら防げた筈なのに、見殺しにしたんだ!!」

「それで、なの……」

シャーリーの目が穏やかになる。ルルーシュの叫びが、心の奥からの本当の叫びだと理解したからだ。シャーリーはルルーシュを抱きしめる。

「辛かったんだね…… 悲しかったんだね…… 悔しかったんだね…… ルル……」

自然と二人の目に涙が滲む。

「もう止めよう。復讐なんて、人殺しなんて、何も産まないよ。私もお父さんの死を乗り越える。だから、ルルもお母さんの死を乗り越えよう」



「ああ……」

ルルーシュの目からどつと涙が溢れる。嗚咽おえいが止らない。

「シャーリー、君の言う通りだ。争いは何も産まない。約束しよう、シャーリー。今直ぐには無理だが、必ず皆が幸せになる方法を考える」

「うん。ありがとう、ルル」

「ああ。ナナリーも、シャーリーも、生徒会の皆も、ブリタリアも、イレブンも、皆が幸せになる世界だ」

ルルーシュが高らかに宣言する。その様子がちょっとおかしい。シャーリーはちよつと意地悪する。

「ねえ。今、私よりもナナちゃんの方を先に言ったよね。

私よりもナナちゃんの方が大事？」

「な!? いや、そんな事は……」

「くすつ。ルルったら、おかしい。冗談よ、本気でそんな事思っていないから」

「……はは」

「それに、ナナちゃんは私も好きだもん。でも、ちょっと焼けちゃうな」

「勘弁してくれよ。ナナリーは妹なんだ。君とは『好き』の意味が違うよ」

「そうよね、ナナちゃんとはH出来ないもんね。ルルとHして良いのは私だけだもん」

「な!? 何を言い出すんだ!？」

「えっ? 違つもの」

「いや、違わないが……」

ルルーシュは苦笑いする。

「ルルとのH、とっても気持ち良かった。友達が彼とのH自慢した理由が分かったよ。ねえ、だから、これからもHしようね」

「ああ、これからもずっと俺とセックスしよう」

「さて、次のポイントに行きますか」

ジェレミアは、別のポイントでルルーシュが掛けたギアスを解除するべく、ホテルを後にした。

「これからもずっとルルとセックス……」

「シャーリー?」

シャーリーの様子がおかしい。視点が定まらず、遠くを見ている。まるでギアスを掛けられた直後の様な……

「まさか!？」

「ねえ、ルル…… セックスしよう……」

シャーリーがルルーシュを押し倒す。目が赤く怪しく光

る。自分のバスタオルを脱ぎ捨て、ルルーシユのバスタオルを剥ぎ取る。

「なんだ、立ってないじゃない……」

シャーリーはルルの股間に手を伸ばし、立つように刺激する。

「待て！ シャーリー！！ 君は！」

こんな状況でも身体は正直だ。シャーリーの刺激で、ルルは挿入可能なまでに硬くなる。そこにシャーリーは腰を落す。

「ひっ！ 痛っ！」

シャーリーの顔が引き攣る。大分時間が経ち、乾いた膣には刺激が強過ぎて、快感ではなく苦痛が襲う。それでも、シャーリーは腰を動かす。

「止めるシャーリー！」

一度掛ったギアスは（ギアスキャンセラーで消されるまで）上書きされない。シャーリーは永遠にルルーシユを求め続けた。



## あとがき

皆さんこんにちは。PARALLEL ACT主催者TomOneです。つたない本を手にとってくださってありがとうございます。つたない本です。

今回、コードギアスで一・二を争って好きなシャーリーが口口に殺されちゃったショックで思わず書いてしまいました。ちなみに好きなもう一人はナナリーです。こっちも死んじゃいましたけど（でも後で復活しそうな予感が）。

配置はなのはずけど…。でも、オンリーは無理でも、コミケだと配置と違う本もある程度は許されるし…。既刊は用意しているし…。決してなのはネタを考えようとしたけど浮かばなかった訳じゃないですよ……。うん、決して……。まあ、同人誌は生物なまものだし、ネタは熱い内に。だって、シャーリー本作りたいた熱が沸騰しちゃったんだもん。それに

シャーリー本少ないし。と言っか、サークルカットにシャーリー無かったのどう言うこと!? ナナリーならあったのに。アーニヤはともかく、ヴィレッタやミレイ会長ですらあるの……

他の本ですけど、今までのマリみて本の総集編を作りました。と言っか、この本の隣に置いてある筈です。憧れの文庫本です。憧れの印刷所印刷です。オフセじゃなくてオンラインデマンドですけど。三百ページと分厚くなっていますので、値段高くなっています。申し訳ありません。

次はなのは本の総集編作るかも知れません。そして、締め切りに余裕があれば、コピー本じゃなくて印刷所に頼む本を増やしていくかも知れません。

そして、神無月の巫女小説を寄稿しました。相互委託なので、これも隣に置いてある筈です。

次のイベントはまだ申し込んでいませんが、マリみてオンリー、なのはオンリーに申し込む予定です。ギアス本作ったので、ギアスオンリーにも申し込もうかと思っています。せつかくなので。

後はサンクリヤ百合オンリーにも委託で出す予定です。  
それでは、今後も面白い本を用意しておきたいと思いま  
すので、よろしくお願ひします。

'08年8月13日

---

## TomOne

1975年6月28日、熊本生まれ。蟹座、O型。過去に『新世紀エヴァンゲリオン』『家なき子レミ』『救命戦士ナノセイバー』『学校の怪談』『天使のしっぽ』『電腦天使』『マリア様がみてる』『かしまし～ガール・ミーツ・ガール～』『魔法少女リリカルなのは』の同人誌を発表する。

---

## 永遠の楔

PARALLEL ACT SERIES

---

2008年 8月17日 第1版発行

定価はカバーに表示してありません

著者 TomOne  
発行者 村上智一  
発行所 PARALLEL ACT

URI <http://p-act.sakura.ne.jp/>  
E-Mail [tomone@p-act.sakura.ne.jp](mailto:tomone@p-act.sakura.ne.jp)

---

印刷機 あなたのプリンタ

---

Printed in Japan

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替えいたします。まずは、当サークルにご連絡ください。  
送料は当サークル負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したもの、自ら印刷したものについてはお取り替え出来ません。



